

Title	神田神保町書店街の成立：日本橋から神保町への移行期の諸問題
Sub Title	
Author	大内, 田鶴子(Ouchi, Tazuko)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2009
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.14 (2009.) ,p.12- 23
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集: 古書流通から見た地域社会
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20090000-0012

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

神田神保町書店街の成立

日本橋から神保町への移行期の諸問題

大内 田鶴子

はじめに

リュシアン・フェーブルが、15 世紀のヨーロッパで、印刷物の出版センターが時代とともに移動したことに着目したように、日本の本の歴史を顧みると、大きな流れとしては、京都から江戸への出版地の移動が知られている。この移動は徳川幕府体制の確立と安定に伴って完成したように思われる。さて、明治維新による政治体制の大きな変化や西欧文化の急激な流入に対応して出版センターがどう移動したかと問えば、日本橋から神田神保町へ、狭い都心、近隣の範囲内での移動に過ぎない。これは何を意味するのであろうか、というのが拙論の基本的な問題である。

神保町書店街は近代から現代にかけて形成されており、現代日本の知識世界の土台となる時代とつながっている。拙稿「古書と出版の比較文化論—比較出版都市論のための試み イギリス編」(江戸川大学紀要『情報と社会』第 18 号 2008 年 3 月 15 日、179-194)と「古書と出版の比較文化論—比較出版都市論のための試み 日本編」(江戸川大学紀要『情報と社会』第 19 号 2009 年 3 月 14 日 79-98)では、本の文化の違いがどのような経緯でどう現れているか、日米比較の形で明らかにしようと試みた。本稿では、これら二稿を前提として、神保町本屋街出現期の前後の本の文化の特徴について整理しようと試みる。

1. 神保町と新知識の流入

(1) 王政復古と西洋の新知識—和魂洋才の問題

川瀬一馬によると、出版文化の視点からみると、明治維新は一つの大きな問題点を残している(川瀬 1984)。明治維新は、日本古来の王政復古であり、尊王攘夷であったから、表向きの形而上的な世界では仏教も儒教も退けられた。いわんや西欧的精神文化も政府が率先して導入するわけにはいかなかった。明治政府は国家神道を創造・強化しながら統治構造を作り上げていった(原 2001)。国家神道が中心であるから、外国のものは穢れているということで表向きは排斥した。しかしながら、現実には西洋の技術力と知識に太刀打ちできず、取り入れざるをえないので、旧幕府方の洋学を身につけていた人材を再利用して科学技術などを盛んに吸収した。その言い訳が和魂洋才である(村上 2009)。

他方、各藩や力を蓄えた武士や商人、豪農たちは自ら渡航して、新政府を担う人々の思惑の外でどんどん西洋の文化・知識・技術を学び、持ち帰った。

川瀬の指摘で重要なことは、この時、印刷技術の導入に皇室が係わらなかったのはどうしたことだろうという「問いかけ」である。それ以前の日本の歴史においては、外国の新しい印刷技術を導入するのは、百万塔陀羅尼以来、常に皇室主導であったのが、明治維新と文明開化の時は皇室がかかわらず、本木昌造という長崎出身の民間人が、近代的活字印刷技術を導入したのであった。「天皇が率先して、鉛の活字を作成されて、これを奨励され、五箇条の御誓文でも印刷されていけば、……この度の大戦もなかったのではないかというような処にまでつながっていく」（川瀬 1984：246）。天皇自らが海外の新しい文化を率先して取り入れる営みが見受けられないという点が、明治維新の一つの問題だとしている。

（2）文明開化と知識の混合

江戸時代を通じて、わが国は日本的、個性的な書物文化を十分発展させたとみることができるが（大内 2009）、明治維新を迎えたこの時の書物の置かれた立場は徳川禁書体制の崩壊であり、一時的な言論の自由、言い換えれば知識の混乱の状況であったろう。それまで禁止されていた思想や知識、西洋の政治思想やキリスト教の教えなども憚りなく流入してくる。科学技術については、国を挙げて導入に努められるようになるのである。その結果、あらゆる知識の内容と方法が混合された、神々の闘争といった社会状況になった。具体的には、神道、国学、漢学、和歌、俳句、文学、蘭学、弁論術、プロテスタント思想、カトリック思想、自由民権思想、近代科学と哲学（経験主義、実証主義、功利主義、進化論、自然法、その後マルクス主義・共産主義・近代経済学 etc.）と言った具合である。

他方、これまで検閲を行っていた本屋仲間も、それを正当化する幕府がなくなったために、再編の時代を迎え、これをきっかけとして新たに起業した人たちの出版業への新規参入の絶好の機会となった。このように日常的、経済的な活動場面でも新しい知識を生産する環境となった。

（3）新政府の頭脳センター

徳川幕府時代の本屋街は日本橋、京橋、伝馬町の一帯に形成された。神田書肆街の神田とは、飯田橋・俎橋・雉子橋から外堀に沿って神田橋に至り、昌平橋・御茶ノ水橋・水道橋を経て飯田橋にいたる範囲をさす（脇村 1979：70）。江戸時代を通じてこの地域は寺も墓地も町屋もなかった。神田は江戸城に近いため幕府の領地で特に堀端の付近は火除地として空地のまま放置されていた。主として旗本の屋敷地として使用されたが、その数は 20 に達していない。神保町周辺の武家地は新政府に没収された後、新政府に協力的な高官や華族、公家などが住み始めた。最も有名な初期の居住者は、岩崎弥太郎、後藤象二郎、大隈重信である。華族の子弟が多く、学習院や錦華学校が設立された。また漢学塾、英語塾、各種学校が開かれることに伴い、明治 10 年頃から初めは小川町・淡路町あたりから、しだいに表神保町の通りに新興の本屋、教材書・参考書・新古本を扱う店ができてくる。

東京大学は明治時代から現在に至るまで官僚機構を支える人材を育成する養成機関である。

東京大学は新政府によって新学問の府として開学された。その源流は江戸時代の学問所（洋学系）に端を発している。徳川幕府は江戸末期になって、一ツ橋通りに蕃書調書^リを移し、これが後に開成所になり、大学南校、東京開成学校を経て、東大になった。明治新学問の源泉の一つとなる。もう一つは幕末になり種痘の研究をする蘭医が幕府から許可を得て神田和泉町の侍屋敷の中に研究所を設け、蘭医学の中心地となった。明治維新とともにこれが医学所となり、これも東大のもう一つの源流となった。村上によると、東京大学は工学系の学部をいち早く設置したことで先進的であったが、神学部なくして「ユニバーシティ」と命名したところが特徴であるという（村上 2009）。

（４）洋学のすすめ—有斐閣・福沢屋・丸善

神田界限で最も古い本屋は、江草斧太郎という下級藩士が一ツ橋通りに開いた古本屋（有斐閣）で、後に有斐閣になる。江草につづいて、小川町、神保町に、中西屋・東洋館・三省堂・富山房ができた。中西屋は丸善の前身であり、早矢士有的（はやしゆうてき）という人が開いた。彼は、幕末に慶應義塾を卒業して、福沢諭吉先生に進められて横浜で本屋を始め、洋書を扱った。まもなく、東京に出て、日本橋で丸善を開いた。丸善では輸入の新本を扱い、中西屋では古本を扱った。中西とは、扱っている「中国の本」と「西洋の本」の頭文字を取ったものである。明治 10 年代の東京の書肆業界をリードしたのは、福沢諭吉と早矢士有的であった。この早矢士という名前は恐らく福沢の思想を表現しているであろう。「目的を持って、矢のように早く仕事をする紳士」と読める。福沢は、彫師・刷師を自ら雇って出版を行い、福沢屋諭吉の名前で書林組合に参加した（脇村 1979 : 87）。ここで言及できるのは、神保町に出現した出版社は必ずしも率先して政府のブレインになろうとした人々だけではなかったことである。脇村の『東西書肆街考』でも、神田神保町の書店の起原に関して、長岡藩など旧幕府方の藩の出身者で新政府での「立身出世」の見通しの立てられなかった立場を強調していた。

（５）イギリス仕込み

東洋館も新しい時代の開幕を告げた本屋である。この店を開いた人物は小野梓という、土佐藩の士族である。彼は倒幕に加わり、政情が落ち着くと東京にもどり、明治 4 年にアメリカ、次にイギリスに行き、明治 7 年に帰国した。ロンドンで政治学を主として勉強し、イギリス流の議論や現実に対する批判的見方を持ち帰った、政治学の先達者である。小野梓は帰国後、日本の政治をよくするための 3 つの方法をあわせて実行しようとした。一つは良い政党であり、二つは良い学校の設立、三つは良書の出版・普及であった。彼は、人を集めて組織化する才能を持っており、すでにロンドンに居る頃から、同地に留学していた日本人を集めて研究会を開くなど定期的な会合を組織して、新しい知識の交換・摂取の機会を持っていた。小野梓は政治と学校だけでは満足せず、民衆教化のためには良書普及が必要と考え、明治 16 年に株式会社東洋館を設立した。学生グループの一人であった坪内逍遙はシェークスピアの『ジュリアス・

シーザー』を翻訳して、東洋館から刊行した（明治 17 年）。小野は自分でも『国憲汎論』を執筆し東洋館から刊行しようとしたが、力尽きて明治 19 年に倒れた。この東洋館の事業を継続したのが同郷の後輩坂本嘉治馬で小川町の東洋館を整理して神保町に小さい店を借り、新たに出版業を始めた。これが富山房で、東洋館から受け継いだ原稿である、天野為之の『経済原論』を刊行した。これは日本人が書いたはじめての経済原論でベストセラーになった。また、天野為之は明治 30 年代に東洋経済新報社の社長になった。明治 28 年に、イギリスのエコノミストを模して刊行された経済雑誌であるが、2 代目の社長となり、明治の終わりまで、社長として毎号執筆を続けた。また、天野は実業教育の重要性を認めており、早稲田実業学校を早稲田学園の中につくった（脇村 1979 : 94）。

ところで、新政府要人は和魂洋才を実践するために洋装になり、鹿鳴館を建てて西洋風の社交を行ったことはよく知られるが、西洋、なかでもイギリス仕込みと思われる別の面白い事実も知られている。明治政府は王政復古のイデオロギーと文明開化の効能を民衆に知らせるために、全国の神官・僧侶を教導職に任命し、民衆に「説教」を説き聞かせたという（前田 1973 : 146）。教会の「説教」を利用して政府宣伝と広報を行ったのは、ピューリタン革命前のイギリス王朝であった（大内 2008）。神官・僧侶の説教師としての利用は結局失敗に終わった。しかし、新知識・情報を知りたいという民衆の欲求に江戸時代から続く芸人である講談師が応えた。伯円という講談師は、「開化講談師」「文明社会の大先達」ともてはやされ、ついにはチョンマゲを切り落とし高座に椅子と机を持ち出し、時には洋服を着て活躍した。演目は、『近世史略』『開化新話谷の鶯』『明治功臣録』『大岡政談』『勤皇雨の桜木』『西洋新未来記』『世界旅行名譽の新話』などである（倉田 1980 : 40）。政府は伯円に、民衆を教化する教導師として「大講義」の肩書きを与えた。市川団十郎よりも地位の高い「大講義」に任じられた伯円を代表とする講談師も明治 30 年代には衰退する（倉田 1980 : 42）。新聞の連載読物として命脈を保っていた講談もやがて小説に取って代わり、講談師は寄席からも追われてしまう。

（6）母国語による学問のはじまり—小野梓と東京専門学校（早稲田大学）

当時東京大学ではほとんど外国人によって外国語で講義され、外国語に上達していることが学生の重要な条件になっていたが、小野は日本人が日本語で講義をするという構想でスタートした。彼は、東京大学で政治・法律を学んでいる学生に目をつけ、接触を図り、同志として協力を求め、当時政界の中心にあった大隈重信に接近するようになった。若い学生と定期的に会合をし、自宅で食事をしつつ、政治の理論と現実を解説して、彼らが大学では学ぶことのできない話をして、現実の世界に対して批判的な見方を持つことを教えた。また、彼は学問の独立の重要性を説き、理想的な学校は宗教と政治から独立したものでなければならないということを主張した（脇村 1979 : 88）。

明治 15 年に東大を卒業した小野グループの高田早苗以下数人は、多くの東大卒業生が入る官界・官学、あるいは政府与党の政党などには見向きもせず、東京専門学校（後の早稲田大学）

開設に積極的に参加した。元来政府のために国家の人材を養成する目的で国費を投じた東大の卒業生が大挙して東大の敵ともいえるべき新しい学校建設に身を投じたことは、政府や東大関係者に衝撃を与えた。以後東京大学では、学生は国家有用の材となるべきで、それには卒業後政府機関または官立学校に入り、政府に協力すべきという考えを常に強調するようになった（脇村 1979 : 90）。東京専門学校は法律・政治・経済・文学が中心であった。

(7) 代言人（弁護士）の需要（文章から弁論へ）

明治 10 年代の東京の社会情勢は、条約改正・国会開設・憲法発布などの目標を掲げて政治運動が盛んであった。これらのためには、立法作業を行わなければならないので、法律の研究や議論が活発になった。代言人²⁾すなわち弁護士という職業が始まって、法律学校への志願者が増加してきた。そうした需要に応じて新たなフランス系と英米系の法律を教える私立学校が続々設立され多くは神田に設けられ、集まってきた。これらのなかから、中央大学、日本大学、明治大学、専修大学、法政大学が生まれた。学生や知識人がさらに増加した（脇村 1979 : 96）。

明治 40 年代は文章から弁論への転換期のはじまりで、東大の一事務員（野間清治）が大学の弁論部の学生を組織して「大日本雄弁会」という出版社を設立し、『雄弁』という雑誌を創刊した（脇村 1979 : 115）。東大や早大から雄弁家が輩出されるのを見て、まず「雄弁」に、ついで「講談」へと口舌の雄を集め、『講談倶楽部』を刊行し、社名を大日本雄弁会講談社に改め、今日の講談社の基礎を築いた。とはいえ言論による戦いはなかなか慣習になじまなかったであろう。「武士道の名誉の巖の上に建てられ、名誉によりて防備されたる国家……は、へ理屈の武器をもって武装せる三百代言の法律家や饒舌の政治家の掌中に急速におちつつある」（新渡戸 1938 : 144）と嘆いている価値観もまだまだ健在であった。

ここで言えることは、母国語で大学教育をはじめたのも、広い視野から政治経済の議論を率先して始めたのも、私立大学と民間人が中心になっていたとことだ。

(8) 西洋合理主義の受け止め方

このような西洋文化・知識の混入に対して、西洋の思想、とりわけ合理主義的思考が行動規範としてどのように受け止められたらだろうか。明治初年にあらゆる階層に受入れられ、思想として大成功を見た『西国立志編』と『学問のすゝめ』のうち、中村正直訳『西国立志編』のオリジナルは、Samuel Smiles, *Self-Help: With Illustration of Character, Conduct, and Perseverance*, London, 1859. であり、「天は自ら助くるものを助く」で有名なキリスト教の精神に基づいた人生の書である。それが「立志編」と名づけられたことが大ヒットの原因かも知れないが、前田愛は、そこで教えられている「節儉」「勤勉」「正直」「時間の尊重」を経済活動との関連で捉えられたかどうかは疑問としている。儒教的な金銭観を脱し切れなかった明治初年の書生達に、これらの経済合理主義を許容する余地があったかどうか（前田 1973 : 135）。『西国立志編』の諸徳目の根底を貫く科学的実証主義や経済的合理主義への理解に欠けていた

ことが、彼等の禁欲主義を規定していたとする。それは、商品生産者の生き方が、他者との人間関係を通じて自己を確認し、拡充する生き方、開かれた生き方であるのに対して、むしろ他人から自己を閉ざして素朴さを維持する生き方で、「対象と主体の対決が行われ」ない「農民的封建的自我」（前田 1973：136）であった、とする。『西国立志編』の読者達が共鳴し、実践した「勤勉」「忍耐」「光陰可惜」等の禁欲的徳目は、鈍重さ、内閉性、フレキシビリティの乏しさの色合いをおびて「旧慣墨守」の農民的な思想様式につながっていったという解釈を行っている。

2. 本屋の動向

(1) 本屋町の移動

日本においては、明治二十年頃までの間に、本屋の企業形態が変化し、書物問屋・地本問屋・絵草子屋・貸本屋から、活版印刷による洋本屋・輸入翻訳本屋・新聞雑誌ジャーナリズムへと主役を交代した。この変化が日本橋から神田神保町への移動に対応している。

明治 20 年代に入って、東京の出版界に大きな変化が起こった。明治 17 年に公布された同業組合準則にのっとり、東京書籍商組合が組織された。明治 20 年当時の組合員の分布は日本橋・京橋に多く、徳川幕府時代の本屋仲間の分布と同じ様相を示している。それが、明治 39 年の組合員構成になると、神田の書店が急激に増加して、全体の構成比から見ても集中が起きている（脇村 1979、大内 2008）。さらに、20 年に組合員のいない地域にもメンバーが増え始め、全体として、3 倍に増加している。これらのなかには、江戸時代に絵草紙を売っていた店なども、洋書の古本に転向するなどして生き延びている。

また組合員の有志の発起で大市が行われるようになり、明治 35 年に組合規則を改正して、正式な組合業務として新古書籍の交換が始まった。これが今日の古書会館で行われている古書市場の始まりである。

(2) 本屋仲間から書籍商組合へ

岩切信一郎が、大倉孫兵衛についての研究の中で、幕末から明治期前半にかけの書林組合の動向について詳しく言及しているので、参考にしよう（岩切 2008：22）。

大倉孫兵衛とは、絵草紙屋から商売を発展させて、東洋陶器・大倉陶園などの産業を興したベンチャー企業家の一人である。孫兵衛は幕末から、開港後の横浜で錦絵を商い（錦栄堂）、後に、物の本屋にも参入して（大倉書店）、活版印刷が盛んになり始めると、洋紙問屋へと業種を拡大する。孫兵衛の足跡に沿って書林組合がどう変化したかが分かる。

本屋（物の本屋）仲間は、享保二年（1717 年）の出版条目による統制・検閲に伴って組織化され、他方で、物の本に数えられない草紙や絵を扱う「草紙地本問屋」も 1790 年（寛政二年）頃から組織化されていた。それぞれ株仲間同志で海賊版を防ぎ、幕府に対しては検閲を行うものである。幕末になると、組織が弱体化して争いが絶えなかった。維新後明治 2 年に出版条例

が出された。本屋仲間は消滅し、東京書林組合が結成された。明治 8 年に出版条例が改正され、仲間による検閲から、内務省への「御届」制に変更される。この年、草紙屋錦栄堂は大倉書店を併設して書林組合に加入している。したがって、相変わらず「物の本屋」と「草双紙屋」の区別は健在であったと思われる。しかし検閲の廃止で、「草紙地本組合」は存在理由を失い、それに代わり明治 8 年に産業振興を目的として「東京地本彫画組合」が設立された。明治 7 年は府立商工会が設立され、このころ産業組合設立ブームであった。「東京地本彫画組合」とは、伝統的木版画の錦絵の製作者達(絵師、彫師、刷師など)の組合であり、盛時の組合員数は 300 人を越えていた(岩切 2008 : 13)。「東京地本彫画組合」の設立趣旨は、外国人土産、輸出産業用の錦絵、カード、ナプキン、テーブルクロス、カレンダー、ハンカチなどの図案にジャポニズムを定着させ、販路を拡大することであった。この錦絵技術が洋陶器のデザインに発展していったことを大倉孫兵衛の足跡が語っている。

明治 14 年(1881 年)に、また組合が入り組んで変化している。「東京書林組合」が再興規約を成立させる。再興とは、地本草紙屋や錦絵屋も、新興のメンバーも含め一部が書林組合員として加入するのである。同時に「東京地本彫画組合」は「地本錦絵営業組合」と名前を変える。なお、明治 18 年の「地本錦絵営業組合」創立願の出願人は、総代松木平吉(大黒屋)以下 11 人でこのうち 10 人が幕末期にすでに名をなした老舗の版元(例えば山中市兵衛(和泉屋))であり、孫兵衛だけが明治以降活躍した新興版元である。組合員総数は 115 人であった。

その後「東京書林組合」の方は、明治 17 年に公布された同業組合準則にのっとり明治 20 年に「東京書籍出版営業組合」(組合員数 131 人)(東京書籍商組合)と名前を変えた。明治 22 年から 24 年には大倉孫兵衛も委員を務め、25 年からは後継者大倉保五郎が委員を務めている。なお、明治 19 年から教科書検定制度が始まっている。岩切の錦栄堂・大倉書店の出版物の分析によると、明治 15 年(1882 年)頃までは木版製版で和綴じの本がつくられており、明治 20 年(1887 年)頃に活字活版による出版が定着している(岩切 2008 : 22)。

(3) 旧貸本屋の終わり

本の風呂敷包みをうず高く背負った貸本屋の風俗が東京市中から姿を消したのは、明治 15.6 年から 20 年にかけてのことであるらしい(前田 1973 : 81)。このころ貸本屋「いろは」が表神保町に店を出した。「いろは」は、お得意先を巡回してあるく、古いタイプの貸本屋ではなく、固定店舗を構え、保証金をとって貸出す新しい型の貸本屋であった。明治 18 年に京橋に開業して、まもなく神田錦町に進出した。神田・本郷の学生街を控えたいろはの顧客はほとんどが書生で公設図書館よりも貸し出し件数が多かった(前田 1973 : 86)。

彼ら(旧貸本屋)がいなくなったのは、その役割が新聞に取って代わられたからである。前田愛によると、明治 7 年刊行の読売新聞をはじめ、続々と発行された小新聞が「新しい民衆的文学回路」を開いた。毎朝配達される小新聞が、貸本屋の戯作に代わる「つづき物」を連載した。小新聞は貸本の見料と見合う安さであった。上野・浅草には茶店を兼ねた新聞縦覧所が開

業して人気を集めたという。日本においても明治維新後に、ロンドンのコーヒー・ハウスのような機能の店が現れたということである。また人力車は傍訓新聞を備え付けて車上の客に読ませたという（前田 1973 : 81）。しかし、日本においては、民衆は新聞に政治論争よりも連載小説を求めていたのではないか、と思われるのである。

貸本屋はその後形態を変えて存続しつづける。先に述べた神田錦町の「いろは」の他に、三田の共益貸本社、銀座の貸本社、淡路町の日本貸本社、錦町の弘文社などが、知識人相手の私設図書館ともいふべき、高級な貸本屋を明治 20 年頃にあいついで開業した（前田 1973 : 86）。しかし、書生相手の「いろは」以外は長続きせず、かえって、大衆を相手に講談本や実録本を貸す「居つきの貸本屋」が明治末年まで生き残った（前田 1973 : 86）。

（4）出版物流通機構の再編・確立

明治期の重大な出来事は、それまでにほぼ発達しきって成熟した日本の本屋文化の本木（もとぎ）に、18 世紀に開化したイギリスの出版文化が輸入されて接木されたことである。明治 20 年代に出版業界の大変革を起こしたのが、博文館と東京堂の創業者大橋左平であった。大橋は町人の出身で、郷里長岡で、本の出版、販売の事業、新聞『越左新聞』の発行などを行っていた。大橋は上京して、大出版企画を立て、新しい雑誌を次々と発行し、単行本は古典を編集してシリーズもので出版した。これらの書物の大量発行と販売は新たに工夫された流通機構によって売りさばかれた。博文館は自社の特約店を全国に設けて直接販売した。

明治 20 年代に入ると、郵便制度の発達、陸上交通・通運の発達によって新たな全国市場ができつつあった。さらに、小学校教育の普及によって全国的に読書力が向上した。また、活字印刷により大量印刷、大量出版が可能になった。大橋はこのような状況を捉え、近代的な大出版産業を興したのであった。大橋の事業が神保町に持つ意義は、取次と卸売に重点を置いた東京堂を神保町に起業したことにある（脇村 1979 : 117）。この頃、本屋町（本屋の集積地）が日本橋界限から神保町界限に移動をはじめていた。神保町の本屋は博文館の全国販売網を使わせてもらい自社の本を全国市場に出した。このようにして、流通販売部門だけを扱う東京堂は手数料・口銭収入を増すことができた。結果として、神保町に出版物流通の近代的な会社ができることとなった。このことが、出版物流通機構（取次）の支配する出版業界という体質と神田への出版産業の集積を形作るうえでのきっかけを与え、今日まで地域産業の基盤として残っている。

3. 日本橋から神保町へ移行期の諸問題

明治維新をきっかけとして、知識の世界も大転換を迫られた。しかしながら、出版都市としてみると、18 世紀の京都から江戸への出版センターの移動のような大きな変化は見られなかった。1868 年を境とする時代の本の文化の諸問題について、流入してきた西洋的な知識の世界に

対して、日本の本の世界ではどのような特徴がみられるのか簡単にまとめておきたい。

(1) 統計から見た近世出版と近世読者の世界

まず、明治に先立つ時代の出版数の動向を確認しておこう。橋口侯之助が、日本古典籍総合目録で書物の成立件数を統計的に調べた結果、興味深い知見を得られた(橋口 2008)。

まず、江戸時代 266 年間(慶長八年 1603 年から慶応四年 1868 年)の書物の総成立件数は 41 万±1 万件と推定されたこと。そのうち、写本が 4 割以上であること。そのことの意味は、検閲を受けていない本が 4 割以上を占めると言うことである。また、これは書名件数であり、出版冊数ではないことに注意を要する。

次に、出版形態、出版地の構成比を、寛永・享保・文化・嘉永の各時代の定点観測として推計された結果、町版(仲間の認可を受けた出版、一般市場向け出版)、私家版、写本の相互の構成比は、時代を経るに従って、つまり近代に近づくにつれて「写本と私家版」の占める割合が高まっていくことである。それは、検閲を受けない出版物の構成比が高まっていることを意味している。また、町版のなかでは、時代を経るに従って、江戸の割合が次第に高まるが、それにも増して草紙系が大変大きく伸びていることが分かっている。

次に書物の総成立件数の増加傾向を、江戸時代全体を通して連続的に解析した結果、全体としては増加基調であるが、ところどころに、それが停滞する時期と、急激に伸びる時期が見られた。1720 年代、1780 年代、1810 年～40 年代にかけて増加率が落ちている。そしてこれらは、享保・天明・天保の三大飢饉の時期と一致する。そして、これらの飢饉後の寛政の改革、天保の改革で書物への規制が強化された時期は、特に顕著な減少はみられず、むしろそれをきっかけに増えているように見える(橋口 2008 : 255)、と橋口氏は述べている。

規制が強化された時期は、「むしろそれをきっかけに増えているように見える」という見解は、日本の書誌学の研究者達は常に直感的に抱いてきたが、今田洋三氏の研究は、その時期の規制の内容や出版物の内容について追求している。明らかに、出版物の増加の背景には社会不安と社会の不満(為政者に対する攻撃)が看取される。社会のストレスが高まると書物の成立件数が増加しているのである。これに対する為政者からの主な規制の項目は、「不確かな事実を書いてはいけない」「他人に迷惑をかけることを書いてはいけない」「政府に関することを書いてはいけない」の三要素であった。おそらく、規制されたから増加したのではなく、噂や政府攻撃の文書が増加したから規制したのであろう(大内 2009)。

(2) 事実と虚偽の扱い方

江戸時代の本の楽しみ方は、虚構の世界に遊ぶものであった。日本の伝統芸能は、浄瑠璃、歌舞伎、茶道から浮世絵にいたるまで、形式化=抽象化=虚構の技を意識的に楽しみ、日常世界から一時的に脱する装置として開発されてきた。そして、政府批判も虚構の世界を舞台として、隠喩によって巧みに繰り広げられていた(今田 2007、大内 2009)。出版統制の多くは、「新し

く出てきた事実」「確かならざる事実」「人の迷惑になる事実（政府批判も含む）」をめぐって行われた。これに対して、近世の西洋の書物文化は、例えば「小説は虚構だから読むべきでない」とする宗教的態度や、誰かの行為について聖書の教義に照らして正しいかどうか、正誤が争われる（極短な例は異端審問である）といった姿勢であった。虚構すなわち嘘をつくことは、最も正しくない態度とされた。香内三郎は、西洋、特にイギリスでのジャーナリズムの発達がキリスト教の正誤論争と深くかかわっており、近代になると、正誤の判断基準が神に代わって、近代科学が支えるようになったのではないかと述べている（香内 2007：458, 515）。日本のジャーナリズム及び学者は原理に照らした正誤論争を徹底的に戦ったことがあるだろうか。事実と虚構の扱い方が近世日本では西洋と本質的に異なっていたと思われる。

（3）言論の自由の保障の仕組みについて

江戸時代を通じて見られた読者の成長と、禁書体制の形成においては、幕府の統制が厳しかったとはいえ、読書人とリテラシーの世界の為政者に対する優位の状況が想像される。日本においては、教義に基づく禁書の歴史的事実は見られず、禁書の理由は先に述べたように「新しい事実（疑わしい事実）」「人の噂・悪口（政府批判）」を書いたり、流通してはいけないというもので、政情不安になると、緊急処置的に作者や出版者に対する取り締まり、処罰が行われた。徳川 260 年間を通して、書物の流通は発達し続け、特に「地下流通」「非公式」流通が、貸本屋の業態の発展とともに世間に深く浸透した。江戸時代には、政府の検閲を受けない種類の書物である、「書き本」や「私家版」の出版が全体の 40%を占めたことは、先に述べたとおりである。これは、西洋的視点からみると、「地下」や「非公式」であったとしても、これだけ多ければ、そこにはすでに一つのパブリックな読者世界が成立していたと仮定できるのではないだろうか。「町版」=お墨付きルートと「私家版」=言論の自由ルート、の二重構造が形成されていたとみることができる（大内 2009）。明治維新後の出版・流通機構の再編過程は、総力戦体制に向かって一元化されていった。言論の自由ルートはどうなったであろうか。

（4）近世読者から近代読者へ

前田愛によると、明治維新の後に日本人の読書生活は大きな変革を迫られた。変革は次の要素において現れた（前田 1973：158）。

- 1) 均質的な読書から多元的な読書へ（非個性的な読書から個性的な読書へ）
- 2) 共同体的な読書から個人的な読書へ
- 3) 音読による享受から黙読へ

前田は明治初年の様々な文学や回想などに現れた読書の形態を論じている。それによると、

「リースマン流の表現をかりるならば、両親や教師から授けられた規範に従って生きることを善と考えていた伝統指向型の人間にかわって、活字をとおして自己の信念を築き上げ、未知の世界へと孤独な冒険を開始する内的指向型の人間」が登場することになる。その過程で語られる過去の思い出には、失われようとする父たちや兄たちの教養圏の残照が垣間見られる。「彼らの子供の頃の読書の記憶は肉親の声の記憶とともに始まる。漢籍の素読、または草双紙の絵解きである。素読の口授は祖父・父・兄の役割であった。……草双紙の絵解きを聞かせるのは祖母・母・姉の声である」(前田 1973: 160)。このような家庭の文字教育は、父=素読型と母=絵解き型という伝統の叡智を示していた。「一方は漢語のこころよい響きを反復することによって規範への馴化を訓え、他方は七五調のなだらかなリズムに乗せて規範から逸脱した世界の所在を開示する。儒教的な秩序はその反世界としての幻想の領域を黙認することによって平衡が保たれる仕組みだが、この近世特有の抑圧と開放のメカニズムは家庭教育のあり方をも規制していた」(前田 1973: 160)。読書の方法が、共同体型から個室型へと変化したことは、キリスト教なかでもプロテスタントの思想の土台がない時、個人の内面をどう変化させていったらうか。

【注】

- 1) 幕府の洋学研究教育機関。1855年に古賀増を洋学所頭取に任じ、翌年蕃書調所(ばんしょしらべしよ)と改称して九段坂下に開設した。幕臣・藩士に語学・地理・科学・兵学などを教えた
- 2) 弁護士の旧称である。江戸時代の公事師に代わるもので、1872年民事について、1876年刑事についておかれ、1876年代言人規則が制定された。1893年旧弁護士法の施行により、弁護士に代わった

【参考文献】

- 岩切信一郎, 2008, 「大倉書店の形成—大倉孫兵衛の明治期出版動向」『大倉山論集』第54輯, 財団法人大倉精神文化研究所, 5-49
- 大内田鶴子, 2008a, 「本屋仲間一本の文化の担い手としての神田神保町古書店街研究」大内田鶴子・熊田俊郎・小山騰・藤田弘夫編『神田神保町とヘイ・オン・ワイ』東信堂, 101-137
- , 2008b, 「古書と出版の比較文化論—比較出版都市論のための試み イギリス編」江戸川大学紀要『情報と社会』第18号, 179-194
- , 2009, 「古書と出版の比較文化論—比較出版都市論のための試み 日本編」江戸川大学紀要『情報と社会』第19号, 79-98
- 岡倉覚三著/村岡博訳, 1929(1994), 『茶の本』岩波文庫(青115-1)
- 香内三郎, 1982, 『活字文化の誕生』晶文社
- , 2004, 『「読者」の誕生』晶文社
- 川瀬一馬, 1984, エディター叢書『入門講話 日本出版文化史』日本エディターズスクール出版部

- 倉田喜弘，1980，『明治大正の民衆娯楽』岩波新書（黄 114）
- 小林章夫，1994，『ロンドンのコーヒー・ハウス—18 世紀のイギリス生活史』PHP 文庫
- 今田洋三，2007，『江戸の禁書』吉川弘文館
- ，1977，『江戸の本屋さん—近世文化史の側面』NHK ブックス 299 藤原書店
- 清水一嘉，1999，『イギリス近代出版の諸相—コーヒー・ハウスから書評まで』世界思想社
- 鈴木俊幸，2007，『江戸の読書熱—自学する読者と書籍流通』平凡社選書 227
- 田中優子，1992，『江戸の想像力』ちくま学芸文庫
- 長友千代治，1982，『近世貸本屋の研究』東京堂出版
- 西山松之助，2006，『江戸文化史』岩波現代文庫 G165
- 新渡戸稲造，1938，『武士道』2006 年，岩波文庫（青 118-1）
- 橋口侯之助，2008，『続和本入門—江戸の本屋と本づくり』平凡社
- 原武史，2001，『<出雲>という思想—近代日本の抹殺された神々』講談社学術文庫
- Feather, John, 1988, *A History of British Publishing*. Chapman & Hall Ltd. (箕輪成男訳, 1991, 『イギリス出版史』玉川大学出版部)
- 福沢諭吉，1978，『学問のすゝめ』岩波文庫
- 前田愛，1973，（有精堂出版），2001 年，『近代読者の成立』岩波現代文庫 文芸 32
- 村井康彦，1979，『茶の文化史』岩波新書 89
- 村上陽一郎，2009，「西欧近代科学と日本の近代化」社会技術研究開発センター編『科学技術と知の精神 文化—新しい科学技術文明の構築に向けて』丸善ブラネット株式会社
- 吉田光邦，1987，『日本科学史』講談社学術文庫 776
- 脇村儀太郎，1979，『東西書肆街考』岩波新書（黄 87）
- 渡辺淳，1995，『カフェ—ユニークな文化の場所』丸善ライブラリー

（おうち たづこ 江戸川大学社会学部）